

燕石
十種
賤
比
を
大
卷

初輯
六

特
イ管
679
5.

9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

備

何事とぬるまの程をきくもさうさう田の法師も並に實



朝多し思ひいらふと老の習あるをきく申のうらりゆりりぬ首の
と事なりま事も今の世のありまもたれもさうり生をわくも
子や孫の志してとせらるるはれぬも日頃子や孫の志の情
る弱るの學問の備は備はる學問といふのありぬとてはぬふたの
亦く用を亦はるのみとて或も又同とて又親と生を勝るる
昔よりがさのめとるるに親より一際學問もせまらるる又孫あり
てはぬらるるもありては一後いふのせふいらりては周の世半事出
し心細くふ社ありゆり能く心はるる親より一孫修めを励む事
又親より一孫修め如く心はるる家なうあり事あるなりと
しきとるるにまめ結はるるはるるの目れるるはるる老のねらるる

障りとのそけり残るいよしの事ともふつゝもてよや孫まごよりま
 遠き世よ思ひ合せそふもなきふりてあてしきなき侍る様とも
 あり又い永き代の末より孫まごいよけをもちひ出ようゝと観みむむと
 そこころとねくはるゝも侍るも例のちりけし事さうし

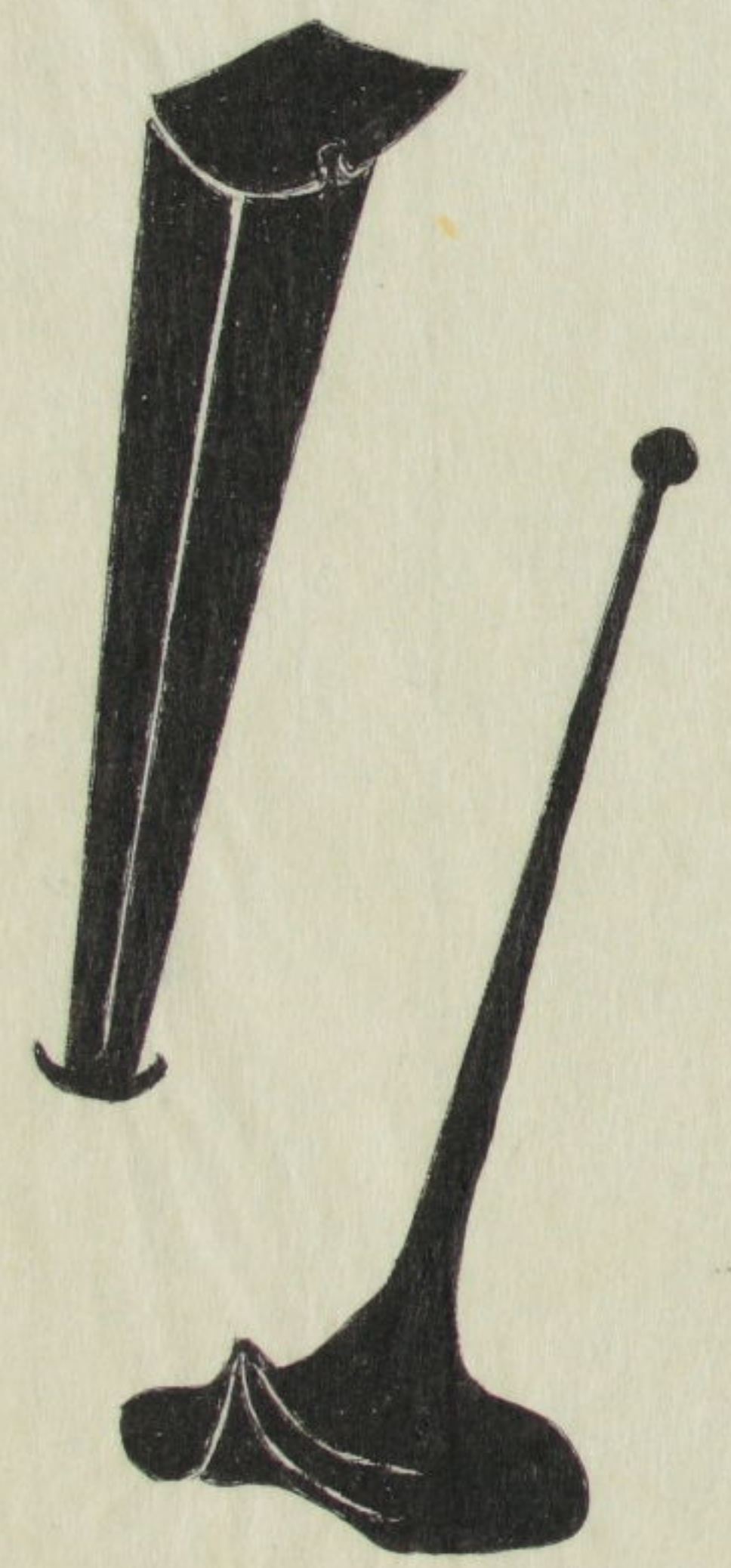
享和二年まの末のうゝ

埋うむれ人まればねお誌

賤のをこ巻

一 茨享のひさりはつ女子のこぶさこいひの初て流のむを父
 人の二条の在番お居らむうが便りの原お姉ある人の許ふら
 てやいひを母ある人をまゝの石侍い女子まてめがじりて
 りても中たりるお子む多ふふええ居りてを縁えとさう
 らておえ合をとりて難ありある人もあし

あつ



一豊後藩の澤田藩と爲る生れたる教坊より流れてより此の
英享の流の類りふ流れて去るも今の如き事と風流の如りたる文句
此の如く此の如く事のみを云つければ文句の如き事半は又此も
残りて流れてより三味線を以て本なる端々として三味線の如き
根元あるより一あて事とある事事のみ一母あどもおれり
こそ船らんけりき事舞妓役者の名人市川海老蔵がうい
らう事のせりぬを若侍ともぐよく受てひいりの口をふ
出ぬり彼程も主願の事と見えり此後流をく事程
女の京より吉原へりて此の介流れてる客に色を多し
ことい事事を子侍の侍より病つてき柄ありき永井丹波
京都の町を以て 作付て理運ある人あり一は禁を以て
京都ふ事りて此の後流を信止する事として流を以て
此の如く事ありて事ありて事ありて事ありて事あり

山流りて此の弊様奔走對死おどと多りりり

その如く申してお對死も稀なる事り此の大坂といふ事り
多しといふ事りされい事後流の如く作りたる澤より大
底の京大坂の事い江戸の稀なる事り今この御判法のは届
きや人のさう〜成事りやう事りも絶くあり
。主願大流として日本大流といふ事り迎き此の因幡山僧抄の
如きもの如く風流の如く左右前後上へ五間へ飛りていり
をい〜事りよ入る事り邪ふ金持業事家をめりけて入り
ゆりも大流有る事り本名漢島底を播として御書付も出
法圓の如く事り此者永井丹波も役なり名を以て出り
別は事り〜事りして御仕直ふ事り存る子供の時分めり
ら〜事りして里巻一段の尻は止りり
。又義右丈師ハ

有窟の御代より流布せしと云りされは後世の流弊次第小室風ふ
 うりて遊士俗人の風俗ゆゑぬりふ成りて世も文金風とて
 わけの腰を突きえ結多き巻く巻髪とて髪の色をりより
 とくきとて月代のうきいと巻返りゆひより衣類対尺の羽織を
 長きひもみ先ふかき結ひ少結の齒くわる格好で腰のものを
 巻く巻髪とて懐きとて約巾結をさきそ市巾をぶらりと
 穿りしりとい

懐廟の御代よりあそ繪ぶさく今笑ひもて遊ひたり
 今の本も端の結んとし事いそ業をつとむる七百人の巻者あそふ
 きても去事の結きより一巻傳はと斗りて誰もおろ者ら
 あそ巻が人も今いゆふとえん

文金風



一志くれたを待たいまも世もよ

有廟の御代耀残り作りて今より思ひ遠く胸り多き格好は甲とて
 御代とて者あそ紀國風とて下下の肩を後ゆりらて故所の肩
 比先くらす後ゆりてあそむる巻を紀列の結士の風俗あそえん
 たり

有君紀別より名を 入つたに府の法事も自然と紀の風俗をまね
つてあり

一 想して延喜寛延の比に未昔の餘風跡りて家此作法さのそ礼に
小身とも捉ま士風も跡りたり物の若く列唯くうありて先正月日
小家といとも妻もともふりたりとて石伝女子ともお家の衣類を
忌整まつ齒くのを祝ふ祝儀をの衆人とも家内一席ふ揃ひて
雑費をいといぬ二汁五菜れせちをや一は月益事一は年給をい
ふきり親類知音入来り時うあつた雑費吸物とて益事をいり
を傳の人も残つた雑費をふるまひたり

凡也一夜庵一といふつひ本は復とも事いふ事少て昔の家
僕ふ四百石の持多つて大沖番ありし家の今う崩つ代ふありて十
五百俵の力をりてそ代ゆつ作法をうの侍もとありて中
幸由は家計のふ限つた世に一般ふけはけりたりと見ゆ

石伝は若衆の給金も昔は若黨の三或分女いふべきあま
或る茶の同針明の敷いた底或を限りたり去りもあつても
もこのみちいふ侍もいふ男うりて今侍に
をりて求ふ満ちある者が一世の衰へる人情の糸利い
をりて後いふ大ある遠

一 若く七ッハッ計りの次あり母方の叔父叔父は叔父の幸始ふ来りて
母の挨拶ふふとむつては届つた隙を費して却て迷惑
をいふ計りいふは侍の危く尚まより隙を焼て振返れ
り月りともりそを例ふ居る子心遠ふ居るりいの
程ふりまて止て今の定家の侍の者あつた茶氏振舞ふ
餘程あつたのむつては届ぬ事あり
一 さき父の相番あつた本うり侍と多茶粉を包み茶をい
まして叔父イホの父の必用を包み水うりて袴着て

挨拶——やうして吸物者二種計酒二三を純子をうて終る事ありきま
代ま下戸を登りかたりつゝの今のやう麻おある菓子も四つはき茶餅
らくかんのもち餅をいゝ事盡てや——餅菓花をうてつるまうに
飯事いふうりきりり吸物を出しやも梳も盆も盆を打て青
藤——して出——しを子も盆も盆を打てり盆も盆の物好
らぬ——して風流りやうを舞繪——させ純子もわこふさ——して
いゝ夜も純子をうて座敷のらぬ梳——してね盆もらぬらんば
さの酒も追ひ馳をも能極——して今酒のさうり衣類の為
ももあしぬ知る事の付て盆もぬう——して純子もわり今の大
純子あて掛ふ盆を打るといふ事——は夫ひて去利よの盆はて雅
あま事も風流あま事もあ——

一 其頃の衣類の袖はも芥子くうりこといふも細くくうりて色も淡黄
かときう用ひ——ふ箱う八九の頃くうりもや淡黄すこして昔物とて

人の端ひ——り着るもも福ふ——して好ま——かぬ色こきりま——や
若盛の人あまの淡黄の衣類をきき事あ——まうふ近頃ふらう——
室曆の頃より又淡黄流しむ——るさ女伊をを好む人あまのわら
淡黄を用ひ——り人のかいつあまおまや家あ——計り——終る
生涯の月ハハ九の頃淡黄すこり——るはいゝも古めり——きさふ子
もも是——たり——ふ又廿前後ふらうて淡黄の色も昔も今もかき
いゝも南風——して伊をよ是——して淡黄の色も昔も今もかき
事とあ——人情のうたりに有極——る物あ——都は終る
——更り——るあ——

一 程おく袖もも——らう事又流し出て父のお徳のふらふ
河内左を帯とり人育——る色も——小男あま——流あま男付ふ
てまうも何事も勤——るま——き人あり——父は帷ふ——り居るを
——るま——と別居といひむ男——折ふ——るま——

袖をいふもふとくくして突袖たる侍と突きて神の
おれぬ極めて是れもきり人ありて袖の中針金を
入くらしもわりとて初の芥子なりし見よ表裏の遠の
よそ人情の及後更ふ計り難し

その後室階のまふありて又袖を細くしき流れて衣類も一
伴わさむ極薄く今くしきもきりて是れき流る表
裡の衣紋もそのまりのみもあらも極く十二重ともりき極く
見ゆるをともしとて三年流れて程なく廢りしり

一 彼河内氏の著人ありて京大阪のま番も朝夕少るもてよりありて服は
程の事ありむりしの少結あるらんとも事程の著人えきふ父の
勝も不意とて有し毎半取人代ありて他の細き登りしり河内氏の
与政ありの當念の登り事もありて父のふと産をわたりしり
一 近頃の事今ふ如く其頃人も少結する程の著人のありしり

如く今の節候にこそ是れ月ありて同風情の者もさきき事ありしり
生涯今年六十五あり七七八のひまで事いふぬあれは他は五十年の日
外ふせふふりり替りしりともむりともさきき事ありしり

一 夫より茶父の御番入せしめて初番の向くれ一はあふ二条の
御城中ありお番ありて花見をするとして小倉の屋敷にて桜を極を
つらめ 御城外の町人共の許より女の少袖を多くしりしり少袖着を
おてまふおめをすふ父あり人の入番一番の役も法をて伽羅を焼て少袖は
ありしり香煙のたると様をあらしてそ損料ふ金もあつてのひも
終りも作りし今の中くは風流ある人もあつて自らの身は
さくおめする人の丈夫もさかき一は六千は流る近と私りまの人の宴合
ふれと夏白ひ袋を多くあむ人も絶てありしり御自らの身
その後佐渡奉りしり一ツ橋の御家老ありては加増まで取らる極田十市を信
夏をたふす能程ふを番を嗜しり奥席に能物と大御番路をを勤

これいふまでも仕方のさういふ句の中へんと思ふ位あり昔の物持ふえも
いふ人多ういふりといふ事有る昔の事と知り又いふ隙に
う整まつゝらと思ひ居るに現は思ひあつて感むゝ事あり
されい昔の風流嗜も今程さうまゝの家より残りりりておれり人の
あれ事と見えりこれいふの事おれと後いふ事あり
いありいりてさうせとさういふ事あり

一 若う姉ある人夫久保氏之信五石石大信 酒井氏といふ人の許へ婚姻ありいふ道具
の後若く婚禮の日の腰逆いふ腰 腰をさうをさういふ腰 腰をさうの作法習入男入の
ちり馬代の取いふ腰 腰をさうは彼是申く當時小身の者といふ後の婚禮の地あり
久々いふも及ね二年計有て彼夫久保氏吉原の遊女を連れありて甚
い困ひをさういふ事ありて夫婦の中をも睦いふ腰 腰をさういふ事あり
姉を取戻さんいふ道具ありいふ及と産金さうあ耳を採て
使をとりていふ事あり仲人の智さう依田屋左衛門いふ腰 腰をさうこそ

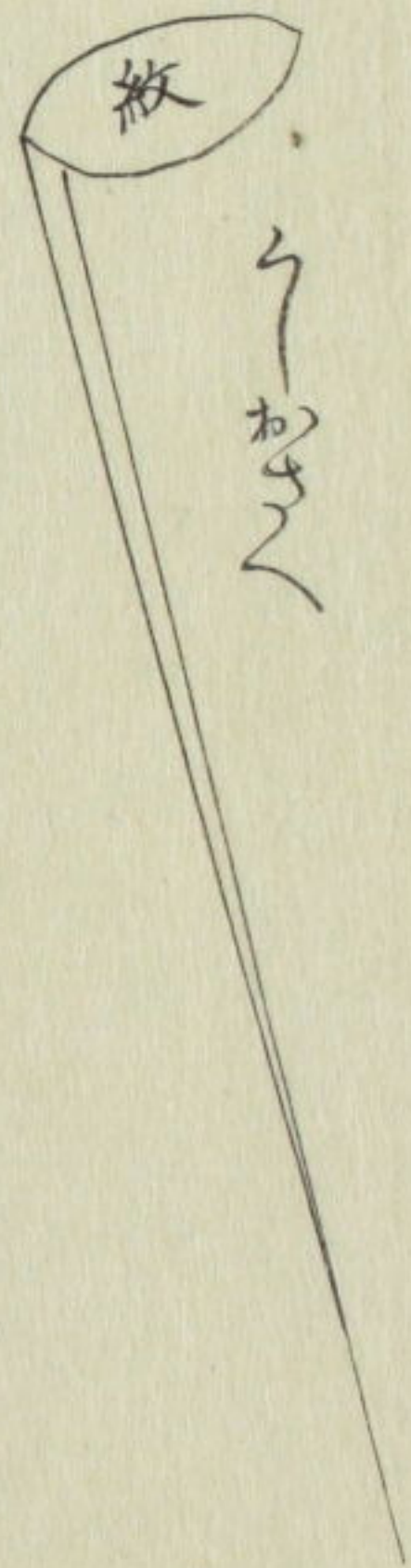
若うあつては時二重の取へ登りて留もさういふ使者の換
扱ふ父のいふ事いふ世合のいふ仲人依田屋左衛門をいふいふ
扱扱の中かもしさういふ仲人留もいふ事いふ先許いふいふいふ
いふ日記いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
先家節いふいふ縁女いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
始り彼合のいふ遠慮いふ事をいふいふいふいふいふいふいふ
事いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

一 昔い女の帽子い物をいりてさういふ綿帽子い年季三早い
これい物い若き女い縁い衣をいりていふいふいふいふいふ
いふ針をい物い縁い具い衣のい年季い役者の紋所いとをい
せいいりて又掃いいといふいふいふいふいふいふいふいふ
縁のいありいりていふいふいふいふいふいふいふいふいふ

帽子針

紋

但一おぬ次中梅撥葉あとの花も有字も有



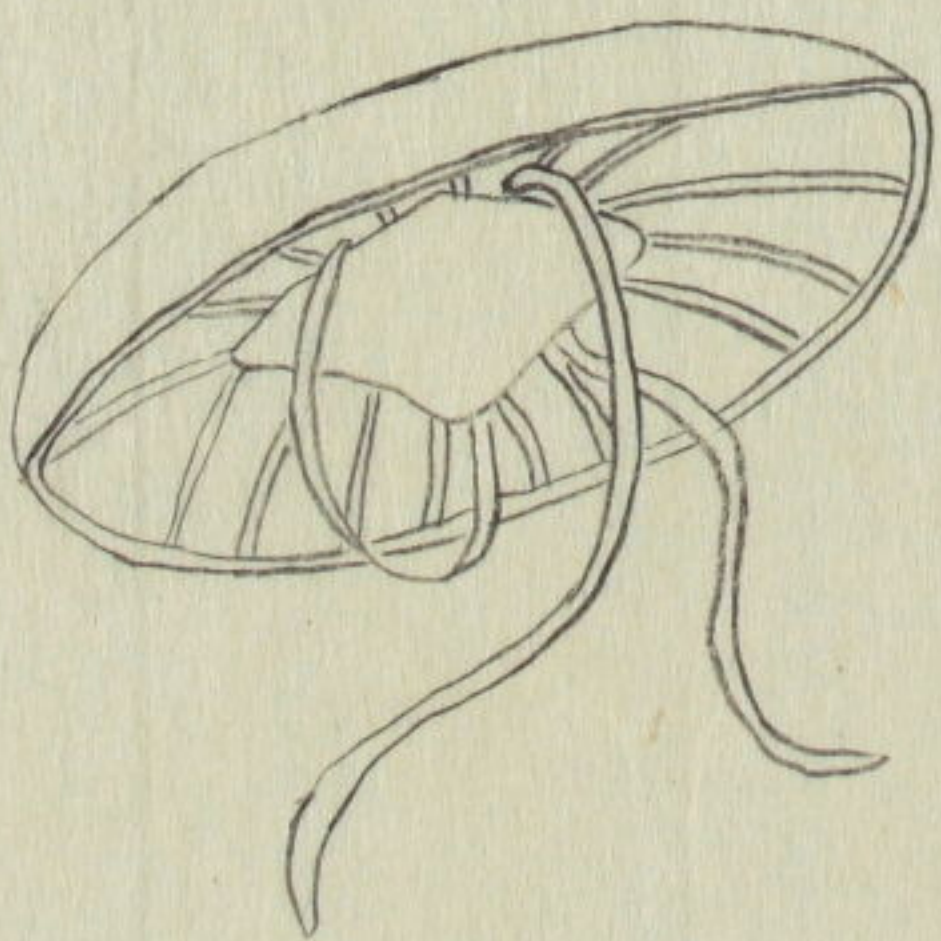
一拂押と銘して紋所或は梅くのおぬをうせり

帽子といふおぬさうりのふぬえすして冠の懸装の上を帽といふりのよ
をこそ帽をたおよりあめをせし紐をさうりしは別冠の中子あり

そ紐のうれいさる處その纓あり依り上代より有來て容易あはさうりのあり
又永享四年富士沖覽の記 皇朝古代將軍義教 佐者連宗師宗長 小倉名金吾の云ふ 雲やん
雲をいへりありの根々ともたせぬ綿ほうしおぬを井推せ 富士の
根と雲をいへり子代つまん綿あうりしは別り是は願皇今川
兼政の綿帽子を献ししとてつけてよみさる事あり又女の昔は赤澤とて
あはしわくを梅くまふ緒をうけてうららのうらら梅くしてあはしり皇朝家
のひとをえりりそ服風刺うららとていふりのありそあはしり今ふあはしり
く女らのうららをえりりるもま番めてあはし見たりやはし見入のうららの
女のうららをつむむいふ根能きあはし昔は江戸ももうららとていふり
敵廟豊洲の侍日光の玄為 入上野増上寺そは法華有るふそは法華
の時め貴族とも女の徳を免さるる増上寺そは同ハ三希といふ著女の
まぬをいへりうららとていふり徳を免さるる増上寺そは同ハ三希といふ著女の
信止あはしり大坂いえ來少あはし波立障後よをを思へしとふらさるる縁結

針を用いまでも希利ふありて山袖の総計ひとをうつく事とありぬ一糸
 意匠の雲井の妻ふは衣うつくしとありしははは今松の事
 とて山袖うつくしの別すこと有るも同語ありてはとも我おありぬ
 第うき事あらんと古の沿革をあらうんいつて故を温てらうしきを
 初うきに松と務の間ありといふありし事有ともらふに思ふ一はりぬ
 うきこの沿革あらと大徳の儒者も知てう人ありぬ
 又うき女も夏の装束をうつくしとありしを尋ね初年の母の夏の衣
 お指しぬとて一装束をうつくしとありしを尋ね居たり昔の市女等の
 うきあり

女の世長草



一室曆の始々雅人のまきと紙とて張るる日傘をば一始て後の女の世長草を
 て今の女の世長草をうつくしといふ事ありて一近きはの子供をうつくし女
 の世長草とて一
 うき形ハ知るも一とて思ふは元来帽子もすくしとて今も帽子をうつくしと
 仍女ハ人も一掃押も又もすくしとて誰もはは者あり一まき傘ハを脩殊

て折く世もなほ招合てらるる中ありしうまの今迄は十餘
其居る系を介無新に引く事あるも一由ともすむし事ある
引ぬるも是下あるといひしうまの引ぬるも是下あるといひし
是も又折く〜と生質りてそと人をもよ〜巧者とのありし

一扇鼻紙袋煙草入の類近色〜と稱り整りたりを此の先地紙賣とて四月
半りもあれい奇麗あると云ふ物極暑といひも是袋雪踏をとり地紙の形
折く〜葉をこ〜計を留め骨を入〜と角の長き葉を細入馬の胸のい
中ゆい〜と扇掛地紙〜と唱て賣たり〜と扇の意新に唱て
扇を相好めあつ〜と又扇掛も有能懸〜とてり女〜と近地紙賣の
男つ〜と〜と取〜と〜とぬ扇を折〜と者も有る〜と十二寛延伊
奈友右市嘉の紐袋の櫛の門入〜と〜とお子皆を令〜と金平骨の
扇子地紙一杯の態を二匹〜とせと種々の時必後り〜と〜と事なり今
中〜と松の扇ある〜と子依も目〜と掛地紙賣も〜との引〜と後

あは煙草入扇の叶馬の次多〜と香〜と奇麗ある油紙の〜とを櫛
形〜と廻りを〜とん〜と紐着〜と女の紐袋の紋所〜とを偶よ〜と
書〜とを用〜と男の喜地又い奇麗〜と雪踏を書〜とを潤〜と用
ひ〜と或ハ柳浪はゆ種を入て招交〜と厚紙〜と引〜と皮の
め〜と紙を能ひ〜と〜と廻り〜と煙草入小用〜とあり
〜と中役人持の持〜と〜と又硝子紙連〜と〜と板〜と能
〜と〜と紙の〜と〜と〜と煙草入小用〜と
煙草の色透を〜と京京紙物の子信紙の持〜と〜と女女竜竜王王の
類男ハ被服被服ア紙を香〜と今ハ福り〜と〜と香女ハ入も
あ〜と紗男女とも山屋府た〜と〜と香ぬ紙〜と〜と紙の
指指方方紙紙小小字字とふあり〜と今ハきん〜と價〜と是ハ今〜と今ハ紙の
〜と價を費ハ位あり〜と〜と〜と〜と用〜と〜とあり
紙煙草入能あり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

或る一は子あり

そこの俗習も昔大由書に由書入又ハ伊波成を程更うて古勤の由書物を一一りしとの極品の鯉魚二連り或る五物一及ツあつて由書入の役成をふ結し介物の入る事とてふけ昔書も昔書と有て是も又おも入大勢の古書のとつて極ふする事をいひしりるうか叔父の入書乃時ふき由書よりんを持せし事とて由書入少有る父あう人とは切を持まきりゆり昔の時ふゆりの由書入由書入しと夜ふとて酒を持まり或大極のふあんうけあを持まりあつてふ類いふも稀あつりぬうる役成書を持まりふを申しり冷夏にあつてとて或は法して後ハ因一廻中合て仕切る由書入を甲片一汁一葉の指を持まりとて更なる者ふとていり返り極細あふゆりのあつ場所ハ皆仕切る甲片一り世話をせあつて能事とりの由書入極細也 仰付る時ハ由書入後やつれとも未仕切る一ふ片

由書入極細也と師匠昔の由書入と一汁一葉ののを振舞りり至極勝りあつりし之由書入の更取を清水をといひり白川候執政せりて由書入のりしより次方ふり事止り今更思ひの由書入計りて茶之候まよと使を香り

○ 昔小普請と改え 仰付りり一はいま由書入以前田原家祭りの由ありし初舎合ふ同役也三人指り料理を由書入の答を之の由書入不浪難くも極ては十五あえりりむ者一丈ツと思ひても二十三人あれ八目もつる昔あれた菓子を由書入後うりあつてつて由書入二十金の指を費りりり由書入極て取つけの者もて者ハ何某あつてハ由書入料理ハ何とて仕切る菓子の由書入後あつてハ同役不浪難くもつる白の度とてさういりり今更思ひもあつりあつてハ由書入者も古役古書入の由書入つてさう昔もあつてハ由書入勤則りり難有事とりり酒も教書屋河岸の夫由書入の由書入

身を突してやまきせしを細支配を引地して与次を勤る人の西村勢
頑者の森杯の了簡ありわらうらわの事とは時着座入りて初て風情
有る所ふも有てやうめんをうひらうて見ふ不感程たりしうふ控く知て
奈の事うら世の人のうらあを各々念といふ事を各々知ぬ是に細
是の初めありて挿入蒲鉾あを能喰も人者遊て思ひつらて味
を是る極に減り思ふは生質あれといふせん又面白き此の者も
同役の男とやういふを合して繪を書せしを會のうらうて是合必事
あり是れも集書すすき由りうらうら可なり事あり画のうら
流のうらうら繪本酒右意として小十人の強居りて画名を都松とて其
世ふりてまやせし人なりまそ百鹽入大三糸二枚折の扇風を持来
りてうせうふ臨入元来不学あれ虎溪の三笑といふ事をありて
居しんとてまやせし三笑といふは修と唐人と石橋の辺ふりを指て其
てまうら画くとて思ひ都松の傳て三笑をまうらうらまをうらうら

とてまままうらうら亭まの親類ありて不苦は繪を拜見仕度と指といふ
ゆらうらうらうら一席ふ入らうらと他人座も是ありて彼扇風を
見て是の扇風の三教と申んうらうらといふ去同役されうらうら是を
釈迦とて志遠をまうら一是の老子孔子と剛卯陸子静をまうらと都
中川助三糸とて遊るうらうら汗を指るゆ地とて居りて後持はうら
源氏繪を見るまうらとて一軸をまうらうらうら一は伊勢の扇の類
も明いさうらふそのあごの心をまうら面白き繪物とつれとまを源氏
繪とてひらうらうら吹聴うらうらわらう人も有れはまうらうらうらと
思ひ居らうらうら扇の面白き事まをうら孫らうらうらうらめあもあ
れうらうらまうらうらうら

一 扇うら子供の時寛文世とて風をうらうら極にお好きうらうら大風をうら
り扇の生質勝り風を不好うらうらまうら西の内紙十枚張うらうらと集の
測瀆をまうら風を人の指てうらうらうらを三の扇へ指ひてあけつらて

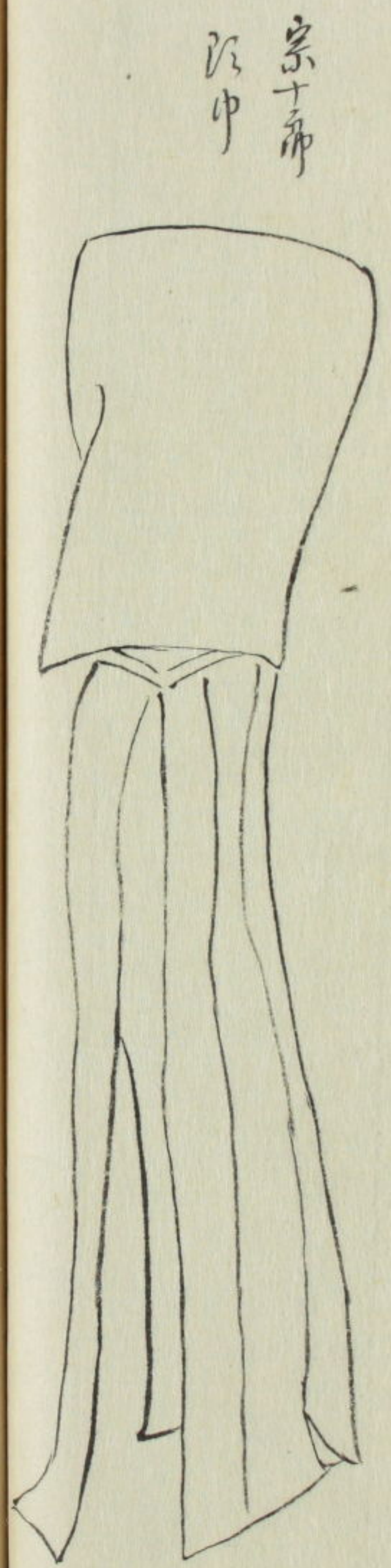
一羽織も世々小柄愛し〜〜延享實延の頃の今の通り並の羽織あり
〜〜^{その後の経き羽織の長さの}うの文金風〜〜あり〜〜羽織も昔〜ありや
〜〜^{その後の経きとこしひり}くそ對丈位の羽織を〜〜柄あり〜〜然るに天運循環〜〜忽ち彼
昔羽織やみて經きね織流りゆ〜〜經きさを〜〜の角袖とて袖もなき
凡そ終りふ計袖形をとりは角同柄の袖風經て是〜〜丈の居りて
羽織の裾の裏と摺拂ひのあり位の經き〜〜托人倍倍〜〜些羽織を
是〜〜り〜〜の〜〜とあり〜〜又昔羽織あり〜〜後並の羽織あり〜
故にも〜〜〜故あり〜〜ユヌ木柄あり〜
〜〜世々〜〜継法師の紀述〜〜の〜
身代の前〜〜〜故あり〜〜り〜
此羽織の情愛ふ〜〜〜三味線流り〜
豊後節も流り〜〜あり文も昔〜〜の風流あり〜〜昔の
所作の流り〜〜り〜〜も〜〜律文字の〜〜として男も〜〜聲も〜

と〜〜り〜〜も〜〜あり〜〜り〜〜り〜〜世々〜〜り〜〜人〜〜者〜
名を貰ふて女の文字に文字相あり〜〜しては女宮あとの地を小座れりき
あり義を更節も對介流り〜〜り〜〜は旗を懸〜〜の〜〜終り〜〜り〜
〜〜後正傳節と〜〜流り〜〜む〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜
〜〜者り〜〜り〜〜是〜〜の〜〜流り〜〜す〜〜り〜

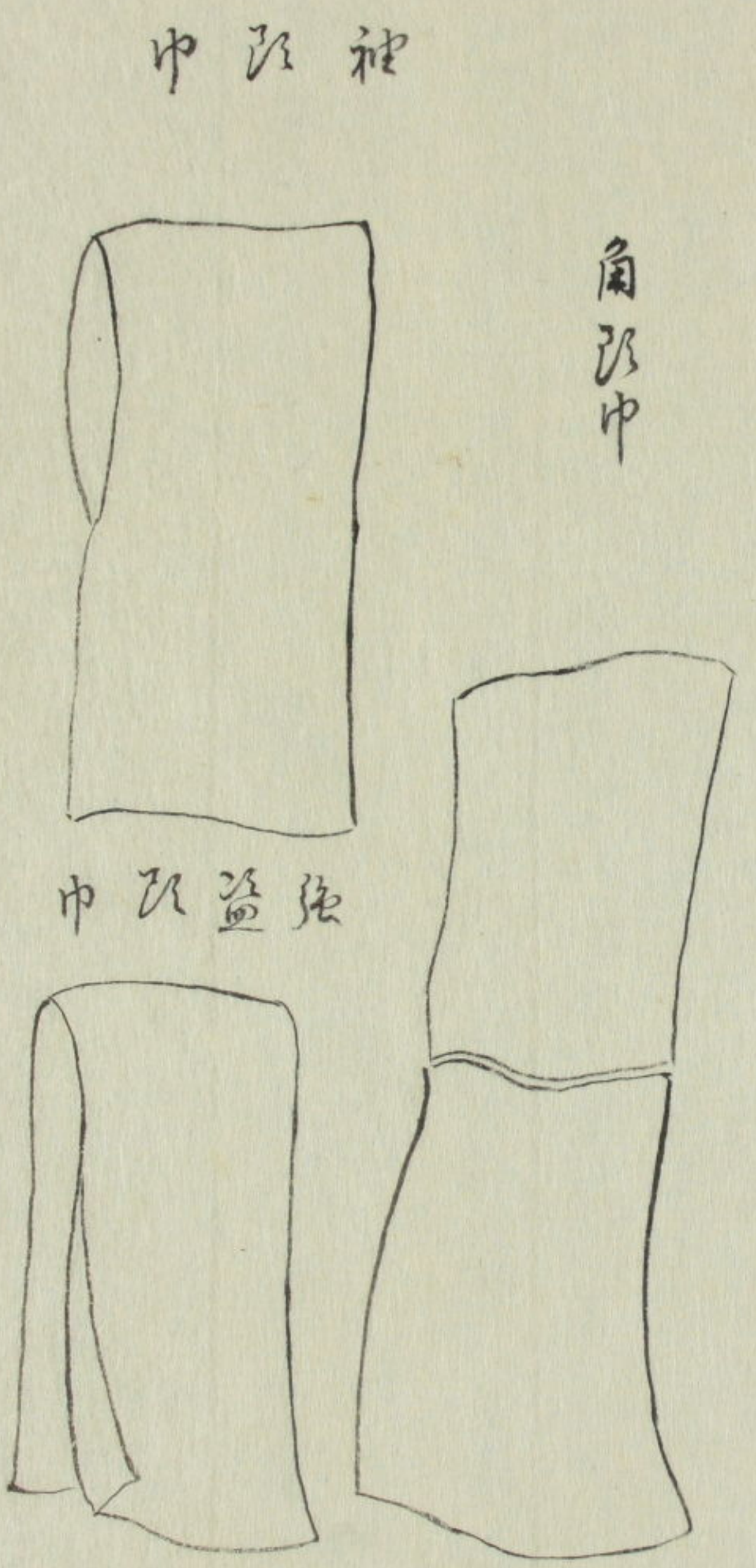
ね三味線の流り〜〜事〜〜事〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の〜
三味線〜〜り〜〜者り〜〜野も〜〜も〜〜毎日の〜〜吹返音の〜〜あり〜
〜〜り〜〜あり〜〜り〜〜の〜〜柄を〜〜を〜〜人〜〜り〜〜り〜
弊止〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜の〜〜を〜〜り〜〜り〜
原者のよ〜〜り〜〜女形あり〜〜立寄敵及び〜〜り〜〜り〜
同女座者流り〜〜り〜〜遊〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜
あき町あり〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜
神〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜〜り〜

既中衣方志の十通り也 本々

又強盜既中衣とて物人のふらぐりやちりめんを捲くふらあり 強盗
 して廻るもり 細い内背もありむきより物人のふらぐりてありきふらぐりの之妙也
 のふらわめて考の人用ていふ人扱の物也
 又誰人のつまふら油既中衣とて建縮緬とて大なる袖を捲て袖のうら顔
 をやして敷を能極に袖の左右をあらひひらけ再くこれの魚計也て次
 より襟肩へみく風を流し扱袖の巾をとりて疊くこれの目計り
 見えを顔へくも遊宴の用ふ極ふら能真ふらりの之を以
 既中衣流れて半族ともふらぐりて是の魚を流して右に袖の制極ふ
 ありて今ふら者あり女らふらふの髪いこすてふらぐり



宗十布
既中



中既袖

角既中

中既強

又思ひゆる位ふあまに既中衣の既中衣の既中衣 本々
 帯ふりてり飛紗綾の袷羽織の巾帳書或は小紋人あとのおとあ 羽織
 してふらぐり今に飛紗綾知る人もあ
 一男女の袴もて既中衣の既中衣 本々

のりも月もおとす元結をてびのよ元結をうけたちかき耳の後
よりわけ髪同より者うあまのりておとすの是ハ捨下びんとて若
元いりみよの取びんをうきやけまより丸くうきとてぬ髪をりのぬ
みず山田ひより 紀別の山姓ぬ波出時の髪ハ ぬ髪良らうまらどぐ本多とて中
判をいうも廣く剃髪の間より中判の見ゆる髪ふしと根をゆるし
けいんと二のよる終りし月代一の髪さうらぬふまうけてあてりや
博野辺のや年長者のりもつさよを應くも若き人達の随ふそのち
せて上りよて と後を前より有松ふあぬのあつぬ又本多とて ぬ髪
髪たのりてわかくしとわけをいふも小かく豆粒のぬゆつさありや
後進士僧客のしけを跡を介長く延して上層家へ押し付角程めて
ゆひより又よまされし風をて町家のもの者あつぬ髪を基層へ削りけ
まより髪をうき後くうきとて髪をゆひより是をうきとて風をり
又巻髪とて髪をの毛を上へ捨下けうきとて巻髪ゆひよりりぬも被髪

風より後の事と女もむし一勝のりわけ流りより遊女の勝心よりか
あひ初めりとりとて後丁の子あ流りぬ髪を初んとてあ松の髪
を見事ふを筋をすしとて焼髪のぬゆひよりたふ初んしとて
りの流りぬて小る物なるとまろく相乗りより又男のひも小髪をか
て髪を背の上計数をか一角を入後くう温和して若き者か見
背も宜髪右流りぬより髪を髪より髪を髪より髪を髪より髪を
ゆり計り髪を背くう又流りより

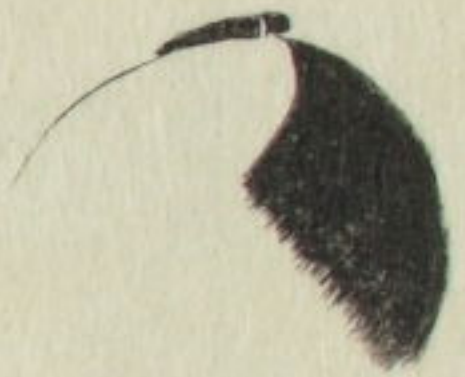
百五本後



ぬまれの風



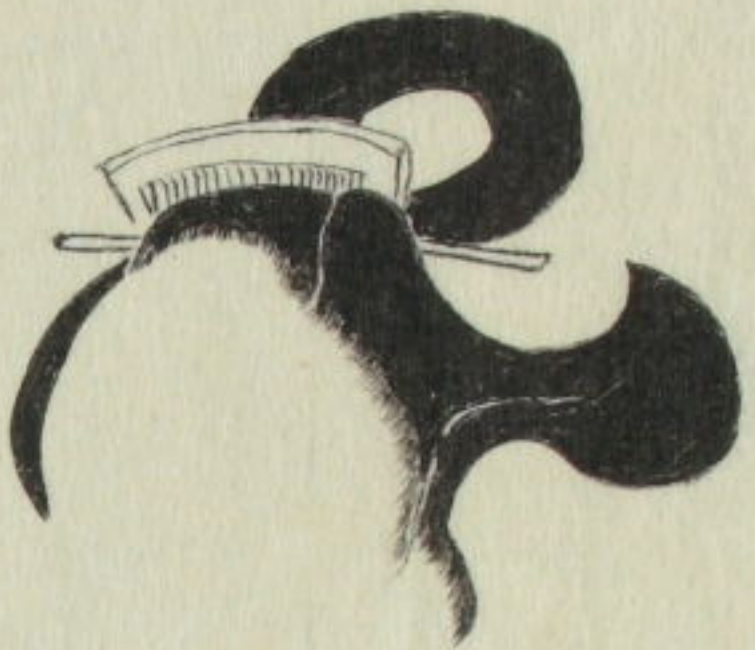
てんてん



巻髪



倭山



焼髪



一 前記の地紙賣の作りく時分ききみとはあやとて是も小寄麗儀形を以て
是ハ幸傳のおぢ 髪つも引中を背さす小簪等の松尾等を脊骨立てぬくの
 刺多きものを入高ふ歩ゆりて是ハ夏ふ髪は此口唇下ふ髪を廻り出入る骨
 骨と骨をてまきまき地紙を同く今を廢りて知りて教人もあし
 一 四月八日の秋迦の誕生とて山さき盃(茶)を入中小秋迦の誕生のすくをて
 尾根いさくの色紙拂て格外花あしを背お貫の坊をうすく髪を格
 外ゆり尾髪も今より一様或はゆりの髪を皆より又二月十五日
 土日の福慶まの形を格外右のわくあし格外ゆりて髪を貫り又猫
 廻りといふもの有りてま加坊その首うくく福慶等を胸のわけをぬきの
 中よりえも知くの髪をゆくく子信の見せの猫只とてあゆり又新
 人坊をふ人面あきりの有りて大あし鏡等を多きと格外秋迦といと高ら
 りふゆり市中を性来してその月を貫りゆりむ福慶とてえて人柄もゆり
 髪ゆりすゆりと世教もゆり骨格もあし見えゆりきその此芝草所

一相學者の神谷登道とて京都よりりりて殊の外に府に鳴りて上座者に
に平澤左衛門といふ者あり是も世果ひしてりて中より今市の中上座
者の着板平侯より出せり

雲馬の
一そは雲列の相撲の釈迦の獄名いぢれ六男出まじり天明駿一さし法とて
落しぬとて一たゞ程の事相撲いふことあるふれた街とて大ま
かそは候より今朝夕の咄いふも彼う等のみえり事とそは若番町辺
に於て頼阿六丁自通り釈迦の達磨門キレなりて帰ふ二三所先ふ縣一きひ
集りし松子といふ事の有中へ人生研り殺人を喧嘩つけわぬぬの
群集する事と思ひ急ぎて進み進みありて向つを見れば二人腰より上計
りておれ見ゆと松板の梅馬よりきてお人あり一是取の見事とて今集りて
志ひぬあり一と急ぎて坂をりりて雲列の門なりて度き所あり人の
散りて松子も釈迦獄の連さる者と別れて釈迦の獄の雲列の裏門一は
り人を始り肝を洗りて彼を男を感一る事ありとてお結あり

一又そは松井を源左衛門といふ者有達磨堂とてまの輪の合おたりとて雲馬の堂
を重くしりて松井を御りて小者を持つてを南坂見附下の廣小路ふち
場を取彼もそのをあらうとて居合力お及び三尺計あるを中一とてま
りり候く寸分の力をぶく御り居合を扱一てその練目を驚馬一とて事
りり小者の力をあらう候は是結とてまてぬと又いふ事ありとて扱り
彼三尺計りの刀を自由山一とて扱りの形をぬきり今見えは程長續
て扱せり一初は松井と名付世の人れり初り一とて法也一のま木ハ
今ふ候も居り 若君様始り候も初一とて 殿の時一書ふ
御免入一とて奥加あり候せあり

市中の周ふ思ひぬと候ふ昔いふ松屋の貝せふとて松を殿く赤藤ふか
らく積まじり又阿の堂一とては橋原あといふ初まふあり候ともうと
しき花ありをそらひまりて繩を裁節も出りていふとてふんとん
てらのを室門一より市中の子供が殿一とてあうりていふ事とて又終り

と馬場の為勢ふ強く幕を造り操を構へ莫保意欲酒肴
中々の及操を以て西へ戻り旅う成事と云り始は花を以て去年免許
結する才子を人必一強先をわたり地々二んりするまより免許版築免
平の才子唯ふ不強意馬終て板を板自身軍政を以て錦のふ
を以て一任運ある終を以て三つあつたの打ち力を以て小ぢり力を
陰長刀組おろの板ひ返してお備てを者あつた中思ひふ一人を以て
信じてりあつたある事とて能見物と云り青人の幸と一とせむ終を競馬を
息のり〜〜終はゆけり加茂のり〜馬のり〜あつたふ〜秋の地を結ひ
流〜場中或新ふ△如判別を板ひ返してを通り山砂を以て板を板
馬帽子して馬のふ古の形を首尾有て中〜〜終はゆけり〜
初を以て声の留〜三つあつた同〜やうなものをいふべきことあり是のみ古
実と見え〜同〜〜時希方より可乃才子版築去作の板所
馬場とて八つめを息のり〜〜同松原源志左衛門の三番所の馬場とて

草庵を息のりする君も志ある人々操を以て見物〜〜あつた人創意操
馬帽子して馬のふ家検見を〜〜皆何れも一世一代あり能も是も是也
見物群集しておひ〜〜
幸あり

新板
出集十六
明和二年
ナリ

懐廟の礼葬を好せ〜〜を以て流のり〜〜事とて以て観世を以て
章奉献〜節遠橋沖門外以地〜實延三年の一世代を〜〜初観の舞
巻を〜〜時天十五〜〜事〜〜屋の内及者とも集りて終〜〜見物
巷競駢〜〜能〜も〜ひり〜も〜ひり〜ひ観世〜〜も〜
〜〜改の初板の流本を以〜〜田安君の林大學の一代の詩文章平心板
以不する若者の事あり〜〜あれた羅の文集の介世〜〜集の及及
雅貴の由〜〜せ〜〜と彼家士の他〜〜観世〜〜慶長の以
以城の事割後観世を以て金春初進〜〜〜後寛文七年京初ぶ終て
觀世を以て初進能を息のりするは〜〜同年室生息のり〜〜世時観世
慶長〜〜を以て終り〜〜しき初進能を息のり〜〜能も操訂〜〜れも

夫も今人の如き極ありたり

一 叔父人の小南市市を掃 紀州の山家より大徳院の修を始り徳川伴市

氏光柳風形 平左衛門右衛門 今枝丈左衛門 徳川山尾丈左衛門 徳川伴市

幸少の伴市 徳川山尾丈左衛門 徳川伴市

と命着まふ人あとの對を勤めたりといふ

ま人の山家のを勤めたりといふは祝儀に馬山家 如ては用子との又市

馬山を止く用人を勤め馬山の人として若黨あり 志有者ありて及て

馬山を掃中 後徳吉を掃 几師をまき 森川紀伊守家の馬山掃

後 徳吉 志有人の門人 徳吉 隨從 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

又青人の菅原 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

青人の菅原 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

門 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

徳川 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

儒者の昭り 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

南郭 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉 徳吉

右綴小の巻一卷吾師森山先生著述也
文化九年壬申六月朔日昏字板同月廿四日
校訂畢
健齋櫛正合

右友人豊登芥子の宛本をより嘉永元年戊申九月

竹孫月号子

明治二十年歲次丁亥初夏

筆者

妻木頼徳



